

日本海・北日本養殖業普及対策事業（クロソイ） （要約）

山田 嘉暢・松坂 洋

目 的

本事業は平成4年～6年度に実施した「特定海域養殖業推進調査（青森県：クロソイ養殖試験）」において、本県日本海地域での、クロソイ養殖の可能性が示唆されたことから、現地への養殖技術の普及啓蒙を図るものである。なお本報告は平成7～11年度に実施した事業の要約である。

結 果

1. 養殖試験

当所で種苗生産されたクロソイを用いて、深浦町北金ヶ沢漁港内の筏に設置した網生簀で、餌料種類、飼育密度を変えた試験区を設定し成長等について検討を行った。

養殖試験は鋼管製筏1基（1辺10m長）を5m四方4面に区分し、網生簀（5×5×4m）を設置し、養殖試験を行った。餌料種類別の試験は配合飼料と配合飼料・生餌（現地で供給されたホッケなどの雑魚をミンチにしたもの）を併用した区に分け、収容開始時の密度はH7年度には7,000尾/区と3,000尾/区、平成8年度は15,000尾/区と23,150尾/区、H9年度は12,500尾/区と13,060尾/区を設定し試験を行った。

その結果、出荷目標重量である500gには2年5カ月で、測定個体の9.3～12.5%が500gに達していた。しかし平均重量で500gに達するには約4年が必要であった。この結果は試験区設定時のみの選別しか行っていないため、個体間のばらつきが大きかったことが考えられ、実際の養殖業では徹底した選別による成長不良個体の間引きが必要であると思われる。また生残率70%前後で養殖を行うためには、1年目の飼育密度は10,000尾以下、2年目は8,000尾前後での飼育密度が望ましいと推測された。

2. 飼育環境調査

飼育環境の基礎資料として試験期間中の水温の変化を調べた結果、北金ヶ沢漁港の平成7～11年の月平均水温は、1月で10℃以下に下がる傾向が見られ、年間では2月が5℃前後と最も低い水温を示した。4月の月上旬から上昇し始め中旬を過ぎると10℃台になり、8月下旬の25℃台まで上昇する。9月以降水温は徐々に低下し、12月上旬には10℃台まで低下する傾向が見られた。

3. 魚病調査

夏期の高水温時期に発生しやすい鰓病等の疾病について調査を行った結果、夏期の高水温期に滑走細菌症やビブリオ症などの発生があったが薬浴により斃死は収束した。

4. 試食試験

平成11年12月11日に大戸瀬漁協で行われたイベント（お魚鮮魚市）開催時に、クロソイ天然魚と養殖魚との味の違いを比較するためソイ汁（じゃっぱ汁）、刺身について、一般町民に試食してもらい、その評価をアンケート調査した。その結果、アンケート参加者は男性が54.0%、女性が43.0%で、40

～60歳代が多かった。また深浦町または近隣の町村から来た人が全体の95%を占めていた。調査を行った結果、ソイ汁では33.0%、刺身では28.0%の人が養殖魚のほうが美味しいと評価したが、60%以上の人が天然魚のほうが美味しいと評価した人が多かった。養殖魚について、特有の臭いがあるか？との質問には臭いを感じないという人が58.0～68.0%を占めていた。また魚を購入する基準については、新鮮さ、値段、旬、大きさなどで購入を決めるなどの回答が得られた。